春の彼岸特集

先祖思って墓参りを

「生まれた意義と生きる喜び」求め

春の彼岸は、春分の日を中日として前後3日間の計7日間です。このころの太陽が沈む真西の方角に、私たちの「いのち」が帰着する「西方極楽浄土」を思い、昔から寺院では法要を勤め、日本人の多くが墓参りをしています。今回は、南房総市二部にある勝善寺の井上孝昌住職（65）に、彼岸と仏教の関係などの話を聞きました。勝善寺は、浄土真宗の京都・東本願寺を本山とする真宗大谷派です。

――なぜ、彼岸に墓参りをするのですか。

私たちは、普段は「楽しい」「おいしい」といった自己関心や自己満足の中に生きているので、仏教を聞いても「馬の耳に念仏」です。

ところが、墓参りをしているときはどうでしょう。自然に自分を愛し、育てた亡き人々との関わりが思い出され、「おかげさま」と頭が下がります。ここが肝心。これが仏教に出合った内実です。おかげさまの世界に生きていることを知らずに、私たちは知らず知らずのうちに仏教に出合っているのです。

――親鸞聖人の教え、浄土真宗とは？

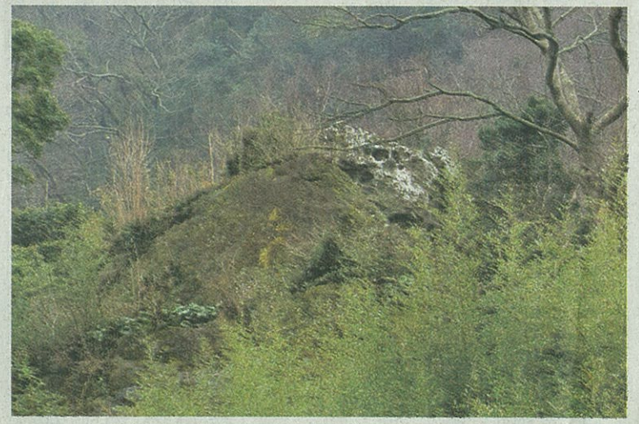
親鸞聖人は、20年間比叡山延暦寺で修行に励み、学問を積みましたが、煩悩を断ずることができませんでした。それまでの仏教は「煩悩を断じて成仏する」教えです。それができない自分は救われざる者、仏の教えに背く「悪人」であると自覚し苦悩しました。それを救ったのが法然上人でした。「阿弥陀仏という仏様は、悪人をこそ救いの対象としている」（悪人正機説）と教えられたのでした。後に親鸞聖人が語った「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」（『歎異抄』）は、親鸞聖人自身が救われた感動の言葉です。

ところで「善人よりも悪人が救われる」とは、変だと思いませんか。

しかし、胸に手を当てて自分のことをよく考えてみてください。生き物を殺したり、盗みをしたり、不倫をしたり、嘘を言ったりしたことはありませんか。仏教では、例えば「お前なんか、死んでしまえ」と口にしたり心に思ったりするだけでも殺人犯と同罪の悪人です。

そうすると、あなたも「悪人」ですよね。そのあなたを救う教えが、浄土真宗です。

初代後藤義光作の手挟みが施された向拝＝同



「飛び石」の伝説が残る岩＝同

――寺に残る文化財は？

本堂向拝（ごはい）には、初代後藤義光最後の作品といわれる龍の彫刻、本堂格天井には房州の絵師・川名楽山らによる81枚の雲龍図、「見返り美人」で有名な浮世絵師・菱川師宣の作品などがあります。

また、寺本堂に向って右側の山の岩には、「飛び石伝説」と呼ばれる言い伝えが残っています。その昔、山の上の寺が焼失した後、村人が協力してこの寺を建てた際、寺の老師を慕って元の寺の周りにあった石が飛んできたといわれる伝説です。ぜひご覧いただきたいですが、「宝の山に入りて、手を空しくして、帰ることなかれ」（源信僧都）。仏教に触れる心で見学をお願いします。

――春彼岸を迎えるに当たって一言お願いします。

仏教は、私たち人間存在の事実を「縁起の道理」として説く教えです。寺院は仏教を発信する場であり、僧侶は仏教に生き、人々にそれを伝える者です。

自己満足を幸せだとして生きている私たちに、それは「本当の幸せか」と、仏教は問い掛けます。この春彼岸を縁に「生まれた意義と生きる喜びを」求め、ともに歩んでいただければうれしいです。

本堂で法話する井上住職＝勝善寺

勝善寺住職プロフィール

井上孝昌（いのうえ・たかまさ）法名は釋孝昌（しゃく・こうしょう）。南房総市の勝善寺に生まれる。地元小中、安房高校を卒業後に国学院大学で日本史を専攻。その後、東京大谷専修学院で真宗大谷派僧侶の資格を取得。千葉県立高校の教員として指導し、父の引退とともに52歳で同寺の住職に就任。年間をとおして法話や集いを開催するなど、一般に開かれた活動を展開している。